

KN2116AとPN0108で作業効率の高い盤石な協力態勢を確立



[会社名] ゆずの里ケーブルテレビ株式会社

[公式ページ URL] <http://www.yuzu-tv.ne.jp/>



ゆずの里ケーブルテレビ株式会社(以下、ゆずテレビ)は、埼玉県入間郡毛呂山町をサービスエリアとするケーブルテレビ局である。

町全体が弱電界地域であった毛呂山町では、地デジ化への移行を機に通信インフラを整備し、どの家にも同じように情報が行きわたるようにと、「地域情報化計画」を策定。これを推進するために、町と入間ケーブルテレビが出資し、2009年4月1日に設立、2010年10月1日に開局した。

ゆずテレビは、グループ会社である入間ケーブルテレビ(以下、入間テレビ)と東松山ケーブルテレビのちょうど中間に位置するため、この局間に敷かれた光ケーブルの通信インフラを活用し、テレビ・パソコン、インターネット、電話の各サービスを提供。FTTHで高品質の通信を実現しながら、加入しやすいサービスプランを揃えている。また、期間限定ではあるが、アナログ停波後も引き続きアナログ放送の受信が可能な「デジアナ変換」サービスは、地デジ対応TVへの買替えに伴う金銭的な負担を軽減させ、緩やかに地デジ化できるとあって好評だ。

毛呂山町のケーブルテレビ局ということで町民の方々も非常に協力的で、ゆずテレビの番組制作には町内で以前から活動しているビデオサークルがお手伝いをするこも。開局してまだ日は浅いものの、周辺地域の名産で、局名の由来ともなっている柚子のように、地域に着々とその根を伸ばしている。

課題

- ◆緊急事態が発生した場合に、いつでも、どこからでも対応できる環境を整えたい
- ◆グループ局からの応援が必要な時でも大半の作業ができるように、電源も遠隔操作できるようにしたい
- ◆限られたラックスペースでもキーボード、モニター、マウスを使用したい

購入製品

- KN2116A (16ポートKVMオーバーザネット) ...1台
- CL5800 (19インチLCD搭載コンソールドロワー) ...1台
- PN0108 (8ポートパワーオーバーザネット) ...1台
- [関連モジュール]
- KA9170 (USB用モジュール) ...12台
- KA9140 (シリアルモジュール) ...1台

導入の効果

- ◆電源を含めて遠隔操作できる環境を整えたことで、大半の作業がどこからでも行えるようになった
- ◆担当者不在時でもシステムを熟知した技術者が対応できる、安定性の高い保守環境を構築することができた
- ◆ドロワーのデュアルスライド構造とKVMスイッチのカテゴリ5ケーブル配線で、ラックスペースを最大限に活用することができた

導入前の課題

限られた人員でもサービスに支障をきたさないようにするには電源管理を含めた遠隔制御が不可欠



担当:ゆずの里ケーブルテレビ株式会社
業務課課長 宮本政幸様

今回はゆずテレビが提供する通信サービスシステムを支えている同局業務部通信課の宮本氏から、ゆずテレビで導入したATEN製品についてお話を伺った。

局を立ち上げるに当たり、グループ会社の入間テレビと同様、通信サービスに何らかの障害が起こった場合でも即座に対応できる環境を構築する必要があった。しかし、入間テレビでの時とは違い、そこには「人手不足」という問題が立ちはだかっていた。

入間テレビには通信専任のスタッフがいるため、担当者不在時のいざという時でも他の同僚を頼ることができるが、ゆずテレビは状況がそれを許さなかった。開局間もない事もあり、各部門1名の態勢で運営しているが、一人ひとりが抱える仕事の重みは大きく、一人でも欠けると業務が成り立たなくなってしまう。このような状況下で、手が離せない業務とシステム障害が重なると身動きが取れない。社内にいる他のスタッフに代わりに作業してもらうこともできなくはないが、不慣れな作業でケーブルを誤って抜いてしまうなどの作業ミスで、二次的な障害が起こらないとも限らない。しかし、サービスを提供する以上、人手不足が原因で対応が遅れたとか、十分にできなかったという言い訳は通用しないのだ。

実際のサービスが始まってからこのような事態に陥るのを避けるためにも、困った時にはいつでも入間テレビから応援できるようにしておかなければならない。このためには単にサーバーの操作が遠隔からできるだけだけでなく、サーバーの電源管理を含めたリモート化が不可欠だ。できるだけ現地に足を運ばなくても作業するにはどうすべきかというところが新システム構築の重要なカギとなったのだ。

購入のポイント

電源管理には KN2116A と親和性の高い PN0108 を採用。CL5800 の省スペース設計でドロワーも導入



KN2116A
リモート2ユーザー16ポートKVMオーバーザネット

機器の選定に当たり、同様のシステムを構築している入間テレビの担当者にヒアリングをしたところ、通常業務でリモートアクセスするにはTelnetやSSHができれば問題ないが、障害の発生時にサーバーのBIOS画面を確認する場面も今後でくるかもしれないので、そのときのためにデジタルKVMスイッチを導入した方がいいとのアドバイスももらったと言う。入間ではリモート2ユーザー16ポートデジタルKVMスイッチのKN2116を使用しているが、担当者も実際使用してその良さを実感していたので、導入するならばこの機種がいい、と強く薦めてきたそう。そのような同僚の言葉を聞いた宮本氏は、この製品なら間違いないと確信し、その後継機種であるKN2116Aの採用を決めた。

もう一つ大事な要件であった遠隔からのサーバー電源の制御についても、同じメーカーの製品がよいだろうということでATEN製品の中で検討。中でも、8ポート電源管理ユニットPN0108は、前述のKN2116Aを含めたATENデジタルKVMスイッチとの親和性が高く、デジタルKVMスイッチのインターフェースから電源管理のメニューを呼び出せるとあって、管理者が



PN0108
8ポートパワーオーバーザネット



CL5800
19インチLCD一体型KVMコンソールドロワー

サーバーのKVM操作と電源管理の両方を扱うのに好都合だったため、電源管理はこの機種を採用することになった。

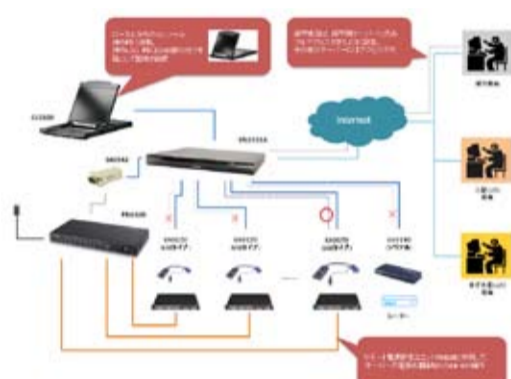
これで本来の要件を満たす機器は揃ってはいたが、欲を言えばローカルで作業するときのことを考えて、ドロワーも導入したいと考えていた。しかし、ラックスペースが当初の計画の半分以下になってしまったことで導入するのを半ば諦めていたという。そんな折、足を運んだInterop2010のATENブースでコンソールドロワーCL5800を目にして、宮本氏はその考えを変えることになる。

「モニター部分だけを立て、キーボード部分をラックにしまっておくことができるので、スペースをとらないところがよかったですね。局内のラックスペースが狭くなりそうだとこの時には既にわかっていたのですが、展示してあったCL5800を実際に見て、スペースが狭くても使えそうだと思います。」

上下パネルが個別にスライドできて省スペースなCL5800の「デュアルスライド構造」が、ドロワーの導入も後押ししたのだ。

導入の効果

電源の遠隔操作で業務を最大限に効率化。熟練スタッフによる応援で、人手不足も難なくカバー



製品導入後のシステム構成(クリックで拡大)

今回、大半の作業を遠隔地からできるようにしたことで、効率のよい作業環境を構築することができたが、これは、やはり電源制御のリモート化をなくしては語れない。

電源管理ユニットPN0108配下にあるサーバーには、通電があると自動的に電源が入るようにBIOSを設定ある。こうしておけば、サーバーの電源を入れ直す必要がある場合でも、PN0108のインターフェースにネットワーク経由でアクセスし、マウスで対象サーバーの電源アイコンをクリックするだけで、そのサーバーの電源ボタンを押したと同じことができてしまう。電源の入れ直しで解決するシステムトラブルにはこの方法で対応すればよいため、電源ボタンを押すために現場に行く必要はなくなった。今では、作業は自分の席から行うことがほとんどで、サーバールームに足を運ぶのは光学ディスクの入替くらいで済んでいるという。

また、基本的には宮本氏が一人に対応するとしても、いざという時には入間テレビに応援を頼めるというのも心強い。リモートアクセスで単に移動時間が短縮できるだけでなく、システムを熟知したエンジニアが作業することで誤操作による二次的なトラブルを避け、サービスを安定して稼働できる環境も整った。当初の課題となっていた人手不足も、どこからでもリモートアクセスしてフォローできるようになったことで、もはや問題ではなくなったのだ。

感想・今後の展開

製品のスペース効率の高さに満足。電源制御のリモート化は他局への展開も視野に



キーボード・タッチパッドパネルをラックに納めてもLCDモニターが使えるCL5800



ラックにマウントされたATEN製品
(上からCL5800、PN0108、KN2116A)

導入した製品にはどれも満足しているが、中でも、CL5800とKN2116Aにスペース効率の高さを感じているとのこと。CL5800は左の写真の通り、下部パネルだけをラックに納めることもできるので、キーボードを使わないときにはラックの全面が広々と使え、スペースの狭さも気にならない。

また、KN2116Aはサーバーとの接続にカテゴリ5ケーブルを使用するため、一般的なアナログKVMケーブルに比べてケーブルがかさばらないのが特長だ。実際の設置作業の際には、元々手狭だったサーバールームに他の業者も入って作業をしていたため窮屈に感じていたが、このような状況下でも作業にそれほど時間がかからずに済んだのは、配線に使うケーブル自体が細かったからだろう、と宮本氏は話す。

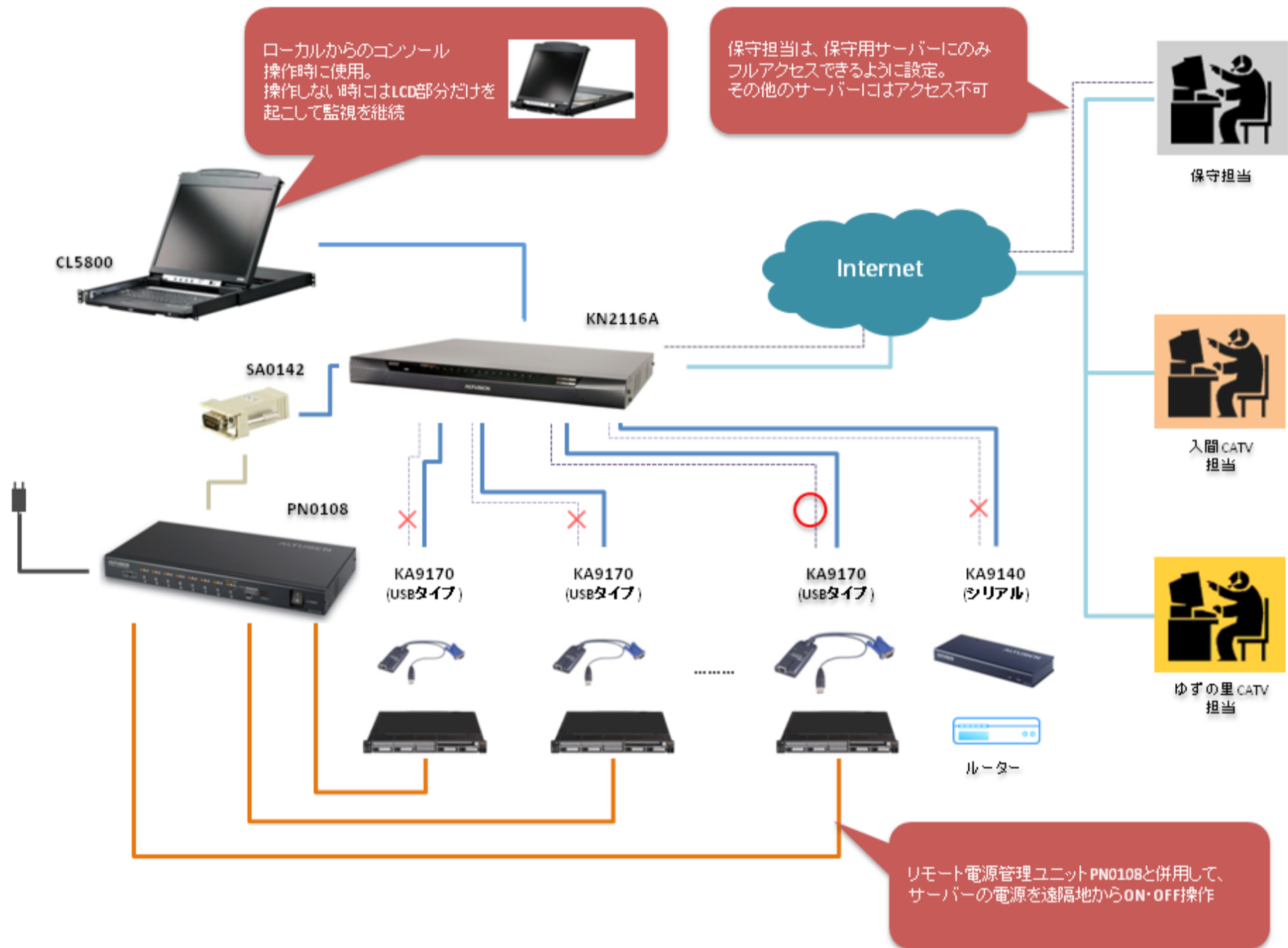
開局したばかりで本格的なサービス運用はこれからとのことであるが、事前検証で製品を使ってみて、リモートアクセスで作業できることの快適さを実感しているようだ。特に、サーバー電源をリモートからON・OFF操作できる利便性に対する評価は高く、他のグループ局の担当者もみな強い関心を示している。今のところシステムは安定して稼働しているため、幸い、緊急時に必要になる場面はまだないが、今後の実運用の中で製品の機能を十分に検証し、他局にも電源制御のリモート化を薦めていきたいと、語っている。

KN2116Aをはじめとする、ATENのデジタルKVMスイッチKVM Over the NET™シリーズの製品は、2010年11月に大幅な機能が追加されたファームウェアバージョンがリリースされた。この新バージョンでは、機器で発生した各種イベントを通知する「SNMPトラップ」に対応している。これはちょうど宮本氏がこの製品にあっという間と思っていた機能だったこともあり、アップグレードにも前向きだ。この新機能も、一人でゆずテレビの通信と技術を切り盛りする多忙な氏にとって、将来きっと強い味方となるに違いない。

会社概要

会社名	ゆずの里ケーブルテレビ株式会社
場所	埼玉県入間郡毛呂山町岩井635-1
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・有線テレビジョン放送法による有線テレビジョン放送事業 ・有線放送を利用した電気通信事業法による第一種電気通信事業

構成図



本文に戻る